元気印による
スペシャル対談

「KAINO」社長
會野 登志美さん × ～アラルト阪神理容美容専門学校理事長
半田 まゆみさん

KAINO　HAIRART

撮影／好川桃子

『愛情を持って接すれば、必ず人は育ちます！』

～人材育成への熱い思いを笑顔いっぱいでトーク～

今回の『ZERO KANSAI』ではスペシャル対談が実現しました。対談者のお一人は理容美容学校の理事長として業界の人材育成に取り組みながら、講演活動なども積極的に行い理美容師の仕事の素晴らしさを多くの人へ伝えているアラルト阪神理容美容専門学校理事長の半田まゆみさん、もうお一人は大阪府内を中心に岡山、福岡、鹿児島にも出店するなど計25店舗を展開されているノリに乗っている元気印のサロン「KAINO」社長の會野登志美さんです。学校の理事長、サロンのオーナーという立場の違いこそあれ、生徒やスタッフに対する愛情や思い入れ、教育熱心さでは共通点が多いお二人。話題の中心になったのも〝人を育てることの大切さ〟でした。じっくりとご覧ください。

全然、美容業界は厳しくないですよ

――KAINOさんは今年めでたく25周年を迎えられました。一般的には厳しいと言われている美容室の経営環境の中ですが、KAINOさんは今年も新規店をオープンされたり、すごく勢いがあると言いますか、パワーを感じます。會野社長の目には現状の美容業界がどのような感じで映っていますか？

會野　先ほど「厳しい」と言われましたが、全然、美容業界は厳しくないですよ。私はあまり周りを見ないようにしています。自分のサロンのことでいっぱい、いっぱいですし、サロンのスタッフを育てることだけに毎日一生懸命頑張っています。

　ですから全然厳しく感じませんし、店に勢いがあるんじゃなくてスタッフ、人材が育っていくんです。だから新店をオープンするんです。今年も鹿児島県にオープンして、親御さんたちに泣いて喜んで頂きました。これも私の財産です。福岡県の店も、岡山県の店も（スタッフの）出身地です。KAINOで頑張ってくれたスタッフが故郷に帰って頑張ってもらうことが私の恩返しだと思っています。

　決してオープンしたいんじゃなくて、オープンせざるを得ないってことです。それにこの業界、なかなかスタッフが続かないと言われますが、私のサロンはずっと辞めないで続きます。だから「早く辞めなさい」「早く出て行きなさい」と隣や横に出す気持ちで、私は毎日言い続けています（笑）。

――それは独立っていうことですか？

會野　そうです。独立もありますし、海外へ行く子もいます。私は常にスタッフに夢や目標を聞きます。そして、そこに向かって一緒にともに頑張っていくんです。KAINOはスタッフたちの夢を叶える会社なんです。

　もちろん売上げを出さなければ、社員たちは潤わないですから、ビジネス上は私も厳しくやっていますが、あまり「お金、お金」「売上げ、売上げ」とは言いません。それよりもやっぱりお客様です。何よりもまず、お客様、そういう気持ちや心の持っているスタッフを育てることが大事。

　よく美容学校さんから「学生時代どうしようもない生徒が、KAINOさんに入ってどうしてこんなに変わるの？」と言われます。「採用もできなかった生徒だったのに」って。逆に美容学校で優秀だった生徒さんの方が無理だったりするんですよ。

半田　分かります。それは一つの傾向なんです。学生時代、優秀な生徒じゃなかった子の方が社会に出てから逆に頑張れるんです。学校時代に優秀な子は、就職に関しては条件が良かったり、名前が通っているいいサロンに決まるんです。ところが、9月ぐらいに辞めちゃうんです。なぜか？と思って理由を聞いてみると、怒られ慣れていない、ということなんです。

會野　はい。

半田　今の生徒は、注意されることと、叱られることの違いが分からないんですね。愛情を持って育てているからこそ、叱ることもあるでしょう。ですが、それが全面人格を否定されたみたいに受け取ってしまうようです。今の生徒って親から大事にされて育てられていますし、優秀な生徒は、打たれ慣れていないと言いますか……。

會野　なるほど。そうかも分からないですね。

半田　学生時代、やんちゃだった生徒とかの方が、夢を実現できる会社に入ったらうまく伸びていくんです。KAINOさんは社長や周りのスタッフの方らが温かく、いい部分を育てて引っ張ってあげているのではないかと思いますね。

不安な点などがあれば全部解消してあげる

――会社の中に変わっていける何か要素があるんでしょうね。

會野　スタッフ同士の関係は「お兄ちゃん、お姉ちゃん」ですよ。それはもう厳しくも言いますが、何かあれば、どこかで誰かがフォローしてあげるようにしています。

半田　なるほど。

會野　「私がこう言ったから頑むね」とか、やっぱりどうしてこういうことを言われるのか、どうしてそこが大事なのかを徹底します。ですからKAINOはミーティングも多いんですよ。

半田　それらのミーティングは仕事が終わってからですか？

會野　終わってからとか、あとは飲み会ですね（笑）。

半田　なるほど、なるほど（笑）。會野社長さんも参加されるのですか？

會野　私がナンバーワンですよ、KAINOで（笑）。お酒の力で言えないことも言えますよね。1年会や2年会などにも全部、私が参加します。

半田　1年生、2年生の会にも入られるのですか？

會野　そうです。そして、常に不安な点などがあれば全部解消するようにしています。

半田　すごいですね。そこまでやっていただけたら、スタッフの皆さんも安心でしょうね。ホームページの求人のDVDを拝見したら、皆さん「夢が実現できること」「家族みたい」とかおっしゃっていました。あと會野社長さんのことを「お母さんみたいとか……」。

會野　皆、「おかん」って言うんですよ。私のこと（笑）。私は、全然経営者じゃなく、お母さんです。スタッフに関していただければ分かると思いますけど、私のイメージは「お母さん」です。

半田　それは分かります。「お話しのされ方ですとか温かいものを感じますし、ガッツや元気がもらえる。

――それは半田理事長にもある共通点ではないでしょうか？

半田　似ていますねえ。私もうちの生徒から「ペアルトの太陽」とか言われています。やっぱり、トップが元気じゃないとダメですよね。

會野　そうです、そうです。

半田　私もそう思います。景気も悪く、正直、しんどい時代です。学校も少子化で募集も難しい。ですがトップが落ち込んでいたり、しんどそうにしていたら、やっぱりダメだと思います。どんな状況でも笑っていないといけない。うちの教職員も「まゆみ先生が笑っているから大丈夫だ」って言いますよ（笑）。

――トップの方が元気で前向きに行動されていると、下の者はとても安心できます。

會野　本当にそうです。トップの責務だと思いますよ。

美容師になりたいという希望者が減っているのが残念

――では半田理事長、美容学校としての立場から美容サロンさんへの要望などありますか？

半田　美容学校に入ってきている生徒って、18歳の時点で美容師になろうとか、ヘアメイクになろうとか、夢を持っているんです。そして具体的な職業像も持っています。そこで業界を見ていて思いますのはサロンの数が増え過ぎている。そんな中でKAINOさんみたいに、きちんと経営方針、教育方針とか理念を持っていらっしゃるサロンはいいのですが、中途半端なサロンが多くなり過ぎて個性がなくなってしまっているように思います。どこも一緒みたいな……。そこに入っても夢が実現できないとか、何をしたらいいんだろうか、みたいに生徒たちは思ってしまうんです。

　それと美容業界の離職率の高さは悲しいと思います。また現在、少子化で高校生の数自体が減っていますが、その中で美容師になりたいという希望者が減少しているのが残念ですね。今、高校生の中で美容師は人気のない職業になってしまっています。

會野　美容師って人気がないんですか？

半田　カリスマ美容師ブームの頃は、女の子の間で1位だったんです。それが今は10何位とかなんですね。それを細かくみていきますと、美容師になりたいんだけど、お給料が少ない。所得別職業の指針をみると、理容師美容師はお給料がすごく低いんです。私はそれが残念なんです。KAINOさんは会社組織にされているから条件的にも良くて満たされていると思うんですが、この業界はお給料面とか、休日などに問題があります。美容業界は夢も叶えられて、私は素晴らしい職業だと思うのですが……。

會野　そうですねえ。

半田　ですから、人気がないのがもったいないなあと思います……。

會野　KAINOも今年で25周年になりますが、最初オープンをしたときは、大阪・堺市で14坪の小さなお店だったんです。お金もないし、朝、店を開けたらつり銭もない、雑誌を買うお金もない（苦笑）。もちろんメーカーさんもディーラーさんのことも知らない。スタッフは近所のスナックのママと、従兄と見習いの4人からのスタートでした。ボロボロのお店だったんで、どうしてもスタッフが辞めてしまうんです。それで今残ってくれているスタッフが、「オーナー、辞めない会社を作り

「生徒たちがヘアラルトは"第2の家"って言ってくれます！」

―半田 まゆみさん

ましょう」って言ってくれました。「そうだ、辞める会社だからスタッフが辞めてしまうんだ、そうじゃなくて、辞めない会社を作ろう」って思ったんです。そこから保険関係や給与関係など、システム問題や食事も徹底して改善していきました。タオルはタオルのリース、掃除は専門業者に任せました。スタッフはサロンに「美容師」として働きに来ているんです。チラシを配布させるのも私は大反対。美容師は美容師、技術をしにサロンに来ているんですからね。

半田 はい、そうですね。

厳しいのは、人やお客様を粗末にしたとき

――KAINOさんではミーティングが多いとのことですが、どのような会議やミーティングを開いていらっしゃるんですか？

會野 いろんな子が参加できるように店長会議、チーフ会議、ほかにもイベント会議やフロア会議、成人式会議やメニュー開発会議などがあります。すべて私が長になって出席しています。これらもスタッフの能力を伸ばしてあげられるように開いています。

半田 それらはスタッフの方から「こういう企画をしましょう」という声が上ってくるんですか？

會野 そうです。

半田 それは、すごい。トップダウンでは、絶対にダメですね。

會野 トップダウンは方向性だけですね。

半田 この10年くらいですごく出店もされて会社として大きく成長されましたが、それはスタッフが多く育ってきたからですか？

會野 そうです。スタッフが育ったからです。職務分けをしたスタッフもたくさんいますし、これからもっと増やしてあげないといけないと思っています。お金を持っている子だけが出店できるという世界はダメ。しっかり（独立できる）その道を作ってあげなきゃいけないと考えています。

――でも優しさだけでなく厳しい部分もお持ちだと思いますが、いかがですか？

會野 厳しいのは、人やお客様を粗末にしたとき。そんなときはすごく怒ります。人に対して上からものを言うとか、そんな子はどんなに技術が上手くできても許しません。

――半田理事長の学校の生徒さんもいつも気持ちよく笑顔で挨拶していただけます。すごく「心」を大切に教育されているように感じますが？

半田 知識も技術も大切ですが、美容師や理容師免許の国家資格を取得するだけなら、他の学校もあります。ヘアラルトに来てもらった人には自分らしさを発揮してもらい自分の意見がはっきりと言えて、のびのびと生きられるよう成長するために2年間しっかり教育しています。そうすればどこのサロンに就職しようが、もし将来美容師を辞めて結婚してお母さんになろうが、たとえ美容師から転職してもちゃんとやっていけると思っています。

會野 それは素晴らしいです。やっぱり人を育てる、というのかな。私たちサロンと同じですよね。

半田 KAINOさんもとてもファミリー的な会社ですが、私の学校も「家族」って感じで、生徒たちが「第2の家」って言ってくれます。高校のとき、朝寝坊だったり、不登校だったり、課金書を見たら、遅刻ばっかりだったという生徒たちが、ヘアラルトに入学したらちゃんと学校に来るんですよ。生徒たちは「学校の休日（土日）がいらない」って言ってますよ（笑）。

會野 すごいな。

半田 「学校が好き！」なんですね。

私が知らないことを生徒に教えてもらったりします

――お二人とも人を育てる心が熱いのと、上から目線ではなく生徒さんやスタッフさんと同じ位置まで降りて行って一緒に考え、一緒に悩み、一緒に解決するという点が共通しているかと感じますね。

半田 會野社長のことをスタッフの方々が「お母さん」と呼ぶのも分かりますし、私のところも確かに私が理事長なんですが生徒たちは「まゆみセンセー」って親しく声をかけますし、私の頭を触ってくるし（笑）。私も生徒全員の名前を覚えていますしね。ヘアスタイル変えたら、「いいね」と言ってあげたりします。仕事や人生では私の方が経験があるので教えることは多いですが、私が知らないことを生徒に教えてもらったり、彼ら彼女らから気付かせてもらうこともあります。人間としては一緒。ある保護者の方に「まゆみ先生、お若く見えますけど、いくつですか？」って聞かれたんですが、「うちの学校は実年齢で生きていない、いかに生きているかよね」と私が言うと、周りにいた生徒たち皆が「うん、うん」とうなづいてくれました。

會野 素晴らしい言葉ですね。

美容師を辞めるということは夢をなくすこと

――なるほど。そこで先ほどの話に戻りますが、KAINOさんは長年勤務されている方が多いので分からないかもしれませんが、私たちがよく聞くのは、せっかく美容師免許を取得して、サロンに入ってもわずか数カ月で辞めちゃうという話なんです。

會野 それは学校で学んだことと、実際に就職してからの夢とにギャップがあるんじゃないですか？ 辞めるということは夢をなくすこと。だから美容師を辞めてしまうんでしょう。それは就職した先の会社に責任があると思いますよ。美容学校は悪くない。一所懸命になって教育をされていますから…。でも、うちのサロンでも辞めた子がいますよ。辞めて「プロレスラーになりたい」と言った子や、「水下大サーカスに入りたい」と言った子も。そんな子たちでも私、一緒に面接へ行きましたから。

――明確に別の夢ができたというのはいいですよね。

半田 ヘアラルトでも辞めて俳優やプロレスラー、ミュージシャンになった子がいます。そういう子はまた学校に遊びに来てくれます。

――別の夢ができて辞めて行くのならOKだと思いますが、ただ何もなく美容をあきらめてしまうのは非常に残念に思います…。

半田 でも、會野社長が言われたようにサロン側にも責任というか、教育システムが曖昧だったり、将来の姿や夢が見えないことが理由だったりするんじゃないでしょうか。たとえば2年経ったとき自分がどうなっているのか、3年経ったときどうなるか、将来が見えない…。

會野 ですから夢を言ってあげないとダメなんです。見本となる良き先輩がいたら、「ああいう風になりたい」と思うようにするんです。

半田 そうなればアシスタントでもアシスタントなりに頑張れるんでしょうね。でも、将来が見えなくなったら、「え！、このまま3年経っても、

お給料も安いままでどうなんだろう」って感じてしまう…。そういうサロンは言ったら悪いですが、安いお給料のアシスタントのままで長く使っているみたいな…。そうなるとダメですよね。

會野　そうですよ。私はトップ連中には「ベンツに乗れ、ジャガーに乗れ」って言っています。「あなたたちが一番にならないとダメ。目標になれ」って。

半田　でも若い人たちにお耐力がなくなっているのも確かです。どんな仕事や業種に就いても、しんどいのは同じ。でも今は親御さんから「なんでうちの子をレッスンでこんな遅くまで残させるんですか？」って言ってくるそうですよね。

會野　私は入社式のときに親御さんに言います。「今日から私が母親ですから、一切口を出してくれるな。口を出すんだったら、今日辞めてください」って。「今日から私が母ですから、美容の母ですから、口を出さないで！」って。

半田　サロン側もよかれと思って、レッスンしているのに、本人も親も「残されてレッスンさせられた」と。そういう風に感じちゃう人がいるんですね。

會野　KAINOは違って、「早く帰りなさい」って言いますよ。「早く帰って、テレビの一つでも見なさい」って。それに「もっと遊べ」って言いますからね。

私はやっぱりスタッフが一番。スタッフが財産なんです。ですから教育もしてあげないといけません。本当に教育費にはお金をかけています。ここまでやって、いい人材が育たない訳がない。だから、いいお客様に来店していただけます。

ですから不景気だ、業界の環境が悪いって思ったことはないです。あれを言う人はおかしいですよね。単に逃げているだけ。自分の会社やサロンでいろいろなことを考えていない。KAINOも当初、スタッフにいっぱい辞められて頭を叩かれ、ボロボロになりました。「それでなんでだろう？」って。そこでスタッフが一言。「人が辞めない会社を作ろう」って。それがバーンとパンチになって、その日から変わっていったんです。

「KAINOはスタッフたちの夢を叶える会社なんです！」

―會野 登志美さん

「サロンに就職するならKAINOへ」

――では會野社長にとっての夢って？

會野　私の夢は、人生が終えるときに、人に自分がどれだけ与えられたかということ。どれだけ人を集めたということではなく、人に与えることができたかですね。

――半田理事長の夢は？

半田　私の夢もどれだけヘアラルトから育ってくれたか。国家試験の合格率とかではなく、「あー、あそこいい学校だね」と言ってもらえること。この前、嬉しかったのは、高校生が出願してくれて「なんでヘアラルトに？」って聞くと、「自分が通っているサロンの人が勧めてくれたから」って。ヘアラルトの卒業生ではないけど、「あの学校はいいよ」って言ってくれたそうなんです。出身校ではないのにヘアラルトのファンになってくれている方って大切ですよね。地域から愛され、美容の技術だけではない人材を育成していける、学校らしくない、家みたいな学校を築いていくことが夢です。

――最後に読者、主な読者である学生さんへ向けて、メッセージを。これからの美容人生も含めて。

會野　「サロンに就職するならKAINOへ」です！

私のところに任せなさい。技術と夢。ともに達成したいという子はKAINOに、です。

半田　それだけバーンと言い切れるサロンさんはやっぱり人が辞めない、辞めないサロンさんは学校側も安心して生徒を送り出せます。

もっともっと業界に入ってきて欲しい

――次に半田理事長からメッセージを。

半田　この仕事が素晴らしいという自信を持って欲しいですね。この業界は手に技術を持って、自分が健康だったら、何歳までも働けます。やりたいことが実現できて、自分の能力でお客様に喜んでいただける仕事です。だから、もっともっとこの業界に入ってきて欲しいですし、入った人は続けて欲しいです。

――私たちも願うことです。憧れや夢を持って入ってきたのだったら、なんとかあきらめずにとりあえず続けて欲しいと願います。

會野　サロンが変わらないと、続けるためには、やっぱり、サロンが変わらないといけません。環境を作ってあげるのが私の仕事。これからも頑張っていきますよ。

――今日は貴重なお話の数々どうもありがとうございました。

會野 登志美さん

株式会社KAINO International　株式会社KAINO
代表取締役社長／COO
1957年堺市生まれ。
実業団バスケットボールチームに所属し、OLを経験した後、23歳で美容師に転身。修業時代を経て1984年（昭和59年）に「カットサロンかいの」をオープン。14坪、スタッフ3名の小さなサロンからのスタート。現在、大阪を中心に計25店舗あり、総勢388名のスタッフがいる。

半田 まゆみさん

学校法人阪神美容学園・ヘアラルト阪神理容美容専門学校　理事長。
関西学院大学法学部卒業。美容師免許取得。ヘアスタイリストの育成に力を注ぐ他、エネルギッシュな講演で全国の人々に勇気と元気の後押しをし、職業理解のための講演では理美容の仕事のすばらしさを多くの人に伝えている。2009年5月には、一般社団法人　日本メイクアップ運営企画の第2回ゴールド・メイクアップ賞「学術・教育部門」を受賞。
著書に「丸刈り奮戦中」（たま出版）、「私らしく　しあわせになる方法」（新高会）、「髪のコードを読む」（女性モード社）。
http://www.handa-mayumi.jp